

T・E・カーハート著

(村松 潔訳)

『パリ左岸のピアノ工房』

(新潮社)

地味なタイトルなので、タイトルに惹かれてこの本を手にする人は少ないかもしれない。パリ左岸というのは、パリの中心を流れる「セーヌ川の左岸」ということなのだが、パリは左岸と右岸でかなり雰囲気が違ってくる。右岸は、観光スポットが多く、有名な店やホテルなどもこちらに集中している。それに対して学校や官庁が多く、また一方で中世の錬金術師に出会えそうな小路があったりするの左岸。この本の主役のピアノ工房もそんな小路の一角にある。パリに住み着いた著者が、ふとしたきっかけでその工房に足を踏み入れたことからすべては始まる……。そこで目にしたのは、夥しい数の修理や調整を待つ中古ピアノ、そして中から出てきたのは、まだ若い昔ながらの職人気質をもったリュックという男。やがて著者は、リュックと親しくなり、毎日のように工房に足を運ぶようになるのだが、アメリカ人の著者にはとうてい理解不能なことが次々と起こる。これはパリの職人の世界を、心から愛情をもって描いた本当に心温まるノンフィクションである。この本を読んで痛感するのは、現代の日本のように溢れていることが、不幸とまでは言えないまでも、いかに幸せとはほど遠いかということ。物を所有することの本来的な喜びとはこういうことなのだ。そしてもうひとつ、仕事に愛情と誇りを持っている人間の生き様の素晴らしさにある。

読書案内

村上春樹著
『アンダーグラウンド』
(講談社)

本書の出版は97年3月。内容は95年3月に起こった地下鉄サリン事件。村上春樹は小説家だが、これはノンフィクション。主に被害者のインタビューから成る。本書は重い。しんどくて読めなくなる。95年、私は阪神大震災とこのサリン事件に強い衝撃を受けた。本書の出版後、素通りできないと思いつつ、長い間手にとれず、ある時やっと購入した。それでもずっと開くことができず、開いてからも途中で何度も中断し、このたびようやく通読した。村上春樹にとって、95年以降の自己の変化は「デタッチメント」から「コミットメント」へ、だそう。私自身、震災・サリン事件・01年の米国同時多発テロの衝撃を、特別な感覚としてずっとひきずっている。

今の高校生はサリン事件を知らないかもしれない。この事件を少し知るためにでも本書を手にとってほしい。大部な本なので拾い読みでもいい。特に最後の二人のインタビューは読んでみてほしい。そして、この凄まじい事件の被害者も、また加害者も、それぞれの日常を生きる人間だったことを見つめてほしい。本書は、大切なものを想像を超えた暴力によって

何の前触れもなく理不尽に踏みこじられた当事者の、その時の記録である。当事者でない私たちが、それ以降に何をどうするかは私たちの問題である。本書はあくまでこの事件を見る一つの視点。いくらかの材料を与えるだけで、異なる視点を持つには、同じ著者の『約束された場所』や、伊藤乾の『さよなら、サイレント・ネイビー』地下鉄に乗った同級生、森達也の『世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい』などもある。

ケンタロウ著

『ケンタロウの和食ムズカシイことぬき!』

『野菜はつかり』

『ドカンと、うまいつまみ』

(以上、すべて講談社)

幕内秀夫著

『粗食のすすめ』(新潮文庫)

毎年三月になると、ひとり暮らしを始める卒業生が来て、「自炊をしたいので、料理本を紹介してください」と、尋ねられます。そんなときに紹介して

いる本が、ケンタロウさんの料理本です。彼は小林カツ代さんの息子さんで、TVにも出ていたので知っている人も多いと思います。彼の料理のモットーは「簡単でおいしく、かつ洒落っ気があって、現実的なもの」だそうですが、まさにその通り。料理の初心者から達人まで満足の内容。シンプルでも奥が深い、まさに絵本のような料理本です。食べることでしか自分はずけられない、ちゃんと料理を作って食べることは、自分を大切することであり、自分の大好きな人を大切にするのです。ケンタロウさんのコラムを読み、料理を作って、食べてみてください。そのことが実感できます。

もう一冊の『粗食のすすめ』

は、「食べることは生きること」「Foodは風土」を、フリーズとしてだけでなく、自分自身の生活の中に実質的に定着させている人にお勧めです。



アルフレッド・W・クロスビー著 (小沢千重子訳)
『飛び道具の人類史』

火を投げるサルが宇宙を飛ばすまで (紀伊国屋書店)

年末に、借りていた本を図書館に返却に行った。その時に何

気なく目に止まったのがこの本である。べつに読みたいと強く

思った訳ではないが、年末年始のヒマつぶしにと借りていった。

中身は、人類が歴史の過程でいかに地球の支配者に成長していったかを追いつながら、ヒトの

現在の問題点について作者の思いが述べられている。読み進んでいくうちにゴダートやフォ

ン・ブラウン等の初期の宇宙開発を担った科学者達が登場してくる。彼らは、子供の頃ジュー

ル・ベルヌや H・G・ウェルズの古典的 SF 小説に熱狂し、宇宙旅行を夢見る少年としてス

タートを切る。

私は、昔読んだ E・E・スミスの銀河パトロールやフレデリック・ブラウンの SF 小説を思い出した。私が SF 小説のなか

に夢をさせている頃、フォン・ブラウンの作ったロケットが宇宙空間に向かって発射されつつあった。彼らは、小説と自らの夢を現実のものとし、私はそれをテレビで観ていた。今や、走るロボットまで現実だ。

今の SF 小説は、H・G・ウェルズやフレデリック・ブラウンの SF 小説とはまったく違う。今、それを読んでいる少年達が何時かその空想の世界を現実に変えていく時がくることだろう。

私はこの本を手にするので、大昔に読んだ本と空想を思い出すことになった。本を読むことから得るものは、いろんな形があることを知らされたような思いがした。

下嶋哲朗著
『平和は「退屈」ですか』
(岩波書店)

アジア・太平洋戦争の敗戦から六十年以上が過ぎた。東京や大阪への大空襲、沖縄戦、広島・長崎への原爆投下、日本が受けた負の遺産。中国大陸、朝鮮半

島、インドシナから太平洋諸島に至るまで、日本が与えた負の遺産。ことばに出来ないほどの地獄が人間の手によって創出され、数多くの人間が死んだ。戦後間もない頃は、この地獄を経験した人々にとって早く忘れてしまいたい遺産であつたろう。しかし、多くの勇気ある人々がこの遺産を戦争を知らない世代に語り継ぐようとしてくれている。私は祖母から戦争の体験話を直接聞いた。しかし、父母は戦後の記憶はあるが戦中は生まれていない。私は戦後の記憶も無い世代だ。今の高校生は言うまでも無い。湾岸戦争やイラク戦争などの映像がテレビを通して現代人の目に届く。それをゲームのような感覚でとらえる若者もいるという。負の遺産はどうすれば人類の未来への正の遺産として継承されるのだろうか。戦争体験の無い世代が戦争を知らない世代へ遺産を語り継げるのだろうか。そんな思いからこの本を読み始めた。本書は元ひめゆり学徒の人たちが高校生たちに講演を行い、その後ティーンをするという所から始まるの

だが、いきなり衝撃を受けた。「言葉が心に届かない」講演を聞いた高校生の発言である。沖縄戦を最前線で体験した本人の話で遺産が継承できないのである。私などが語り継げるはずがない。一瞬、愕然とした。しかし、元ひめゆり学徒の人々や一部の若者はこの問題の答えを探そうと真剣に取り組んだ。沖縄戦を体験した人々と、体験していない人々の共同作業。導き出されたいくつかの答え。私自身も一歩前に進むことが出来ました。

ドナ・W・クロス著

(阪田由美子訳)

『女教皇ヨハンナ』上・下

(草思社)

久しぶりに世界史の授業を担当することになって、一年間、世界史関係の本を沢山読んだ。その中で一番面白く読めた本がこの小説であった。上下二冊で六百頁を超える長編だが、わずか二日で一気に読み終えてしまった。再読したいと思い、今も座右に置いている。

ローマ・カトリック教会の頂点に立つ教皇は、初代のペテロから現在のベネディクト十六世まで約二百七十年代を数える。全員男性とされているところが、九世紀にヨハンナという名の女性教皇が存在したことが十三世紀の教皇年代記に記載されているのである。彼女は男装であつたために露見せず出世できたのだが、ローマの路上で愛人の子を産み落として亡くなったという。ヨハンナは怒った群衆によって石打の刑にされたらしい。この小説は謎の多い女性教皇の生涯を描いたもので、数奇な運命や次々と起こる予期せぬ事件これらは遙かに遠い九世紀のヨーロッパの出来事とは思えない。「教皇ヨハンナは、西洋史に登場する最も魅力的で、異色でかつ知名度の低い人物のひとつである」(著者)。読後、ヨハンナについて調べたところ、意外にも多くの本に記されていた。例えば、小長谷正明著『ローマ教皇検死録』(中公新書)。映画化されることが決まり、すでに準備が進んでいるらしい。話題作になる予感がする。